太宰府人物志

資料室だより⑮

橋本栄一少尉戦中戦後奮戦記

橋本栄一は大正3（1914）年生まれ。筑紫中学校を卒業後、仏道を志し久留米の梅林寺で修行を積みますが、間もなく陸軍士官学校に入校（第51期生カ）。陸軍将校として終戦を迎え、養父が住職をつとめる太宰府の光明寺に戻ります。やがて、筑中の後輩であった「戦中派」青年・西高辻信貞前太宰府天満宮宮司とともに、長い戦争により活気を失った太宰府を若い力で興すことを計画します。この試みが、後に太宰府町政に革新の風を吹き込む青年グループ「新生会」結成のきっかけとなりました。筑中同窓の有吉林之助太宰府市初代市長も、この時の橋本たちの呼びかけにより集まった青年の一人です。

軍人としての橋本は、ノモンハン事件を描いた戦記『ノロ高地－ノモンハン戦車殲滅戦記』にその武勇を伝えています。書中「橋本少尉」として活躍、この『ノロ高地』は版に版を重ね、大好評を博しました。続編の『続ノロ高地』では、橋本少尉は負傷した中隊長に代わって隊を率い奮戦します。

しかし終戦を迎え、彼を待っていたのは「追放」でした。軍隊を解かれ太宰府に戻ったものの、軍人であり宗教者であるという彼の経歴が占領下に随意の活動を許さず、復興計画の緒にしてやむなく太宰府を去ることとなり、しばらく居と職を転々とする生活が続きます。

ところが1950年代に入ると、橋本の戦前の経歴が物を言い、軍人時代の人脈が大いに機能する時代となります。いわゆる「逆コース」の流れにより、中央や地方の官界・政界の要職に知己の顔が見えはじめます。人望も厚かった橋本のところには自然と政治向きの用談が持ち込まれるようになりました。道路舗装業もその一つで、橋本は政府関係者の依頼により、沖縄の珊瑚の死骸を活用した道路舗装の研究に着手、その実用化に成功します。この事業は道路資材の輸出による外貨獲得、という沖縄復興支援策の一環でした。以後、橋本は福岡で道路舗装業を営むかたわら、「口利き役」「融通役」として戦後政治の裡に活躍します。平成3年（1991）没。享年78歳。

市史資料室　藤田　理子